

・ 最初のシェアタイムは前回、陽子さんから頂いた2つの宿題について話しました。

一つ目は、2026年12月にチーム全体として何が得られたと感じられるか、チーム全体で成し遂げることを決めてほしいということでした。

それぞれ考えてきた意見が上がったものの、意気投合という雰囲気にはならず、沈黙の時間も多く流れる状況でした。

一人のメンバーから、自分以外のメンバーの行動や反応があまりにも一致し過ぎていて気味が悪いと意見が出されました。

別のメンバーがその後に言った「そう思われるほど一致団結しているか」というとそうではない」という感覚は、私にもありました。

陽子さんのコメントに右向け右し過ぎている(皆が何も考えず同じものを信仰している)ことは、傍からそう見られても仕方のないことだとも思いました。

膠着状態になった私たちを見て、陽子さんが今年は個を極めようと伝えてくれました。

陽子さんが出してほしかったのは合宿という目標でしたが、誰からもアイディアが出ないほどに、まだ私たちはバラバラなのだと思います。

そしてそのバラバラも、個性と言うほど際立ったものでもまだないのだと思いました。

もう一つの問いは、陽子さんが仕事の都合で大阪に来られたとメッセージをくれていたものの、誰からも何をしていたのかの突っ込みがなかったのは何故なのかという問いかけでした。

その答えをすぐに出したメンバーと、この日まで出していなかったメンバーがいたこと、そして自身の存在を「リスク」とコメントされたことで、陽子さんは私たちとの距離をまた感じたと思います。

そのことを感じるだけにせずに、はっきりと伝えることが、陽子さんの人間関係の作り方なのだと思います。

セッションでは、私がクライアントとして、会社の経営プロジェクトの公募に応募しなかったのに、選ばれたメンバーに同期が入っていたことにモヤモヤするという話をしました。

コーチ役の方からは振り返りの時に、私が管理職の道か現場のスペシャリストかを決め切れていないのではないかというコメントを頂きました。

陽子さんから、私が同期が経営に携わるようになったとしたら、むしろ自分のやりたいことをやることに有利になるのではという観点を示されました。

また私にその観点が全く抜け落ちていることが、足りていないことと伝えられました。

コーチに対しても、大きな組織に所属するからこそ言えることがあると伝えられました。

次はそれまでも私がクライアントに対し、ジャーナルで伝えていた上司に関する思いについて整理するセッションでした。

コーチ役に選んで頂きましたが、クライアントの望みや迷いのポイントが見えずに苦戦しました。

收拾がつかず、続いて、私のセッションでコーチをしてくれたメンバーがもう一度セッションを行いました。

陽子さんからクライアントが何か解決したいことがある訳ではないという点で、私とこのセッションが共通しているものがあり、その対応について、コーチ役の方が普段周りに対して思っている、訳が分からないのに会話として成り立たせてしまう日常が反映されていると伝えられました。

個々のセッションが単独ではなく、つながりを浮かび上がらせてくれるというのが陽子さんの作り上げた場の力だと思いました。

今回も陽子さん、一緒に参加した皆さん、ありがとうございました！

(A.S 40代女性 大阪府)